

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

The Newsletter **CNEAS**

創刊号



発刊の辞

東北大学東北アジア研究センター長

吉田 忠

本研究センターは、従来学術交流が必ずしも充分ではなかった東北アジア地域を、総合的・学術的に研究する機関として平成8年に設置されました。以来3年間、一同、個人レベルでも、また組織的プロジェクトとしても本センターの設置目的にふさわしい研究を推進してきております。さらに平成10年には、シベリアのノボシビルスク市アカデミータウンに、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の協力のもと、本センターの連絡事務所（通称日本館）を開設し、日本とシベリアの学術、文化、技術の交流と日・口の友好促進に貢献する拠点として活動を展開しております。本センターは、人文科学諸分野と自然科学や技術開発分野を有機的に結合・融合することにより、今世紀末になって顕在化してきた人類の当面するさまざまな課題の解決に向け、創造的な研究の進展と東北アジア地域との学術交流の促進を期しております。

しかし、より一層体系的で精度の高い研究成果を得るには、外部の研究者の方々との連携は不可欠であり、人的ネットワークを通じた研究交流体制の構築が求められております。そうしたネットワーク化のための一助としてニュースレターが大いに機能することを期し、ここに発刊する運びとなりました。もって私たちの活動の一端をお伝えできますならば幸いに存じます。

目次

発刊の挨拶	1
速報	1
東北アジア学術交流懇話会設立の趣意	2
当面の目標と事業の概要	2
萬華鏡 ロシア・アカデムゴロドクでの江沢民主席の講演（要旨）	3
Area Report SIGNAL [モンゴル・中国]	4
[朝鮮地域・ロシア]	5
研究機関紹介 ロシア科学アカデミー・シベリア支部	6
最前線探訪 バーチャル・ラボラトリーの試み	6
日本館から ノボシビルスク消息	7
センター動向 客員研究者の紹介	8

速報

「東北アジア学術交流懇話会」設立

産・学の緊密な連携によって更なる学術の進展を図ろうという「東北アジア学術交流懇話会」が、東北アジア研究センターを事務拠点として設立された。ロシアをはじめ当該地域各国との共同研究や技術交流等において大いにその活動が期待される。（関連記事次頁）

東北アジア学術交流懇話会設立の趣意

東北アジアは、西はウラル山脈から東はベーリング海に達するシベリア、沿海州、さらにアラスカにまで拡がり、南は中央アジア、モンゴル、そして中国北部から朝鮮半島までの広大な地域を占め、多様な人種、民族、豊富な資源と環境を擁し、大きな潜在力を有する地域であり、21世紀の国際社会においてきわめて重要な役割を果たすと考えられる。

東北大学東北アジア研究センターはそのような地域を研究対象として、従来の日本に類例のない

文系と理工系の専門家による研究体制を組織し、総合的な学術的研究と解明を通じて国際社会に貢献することを目的として、平成8/9年度に設置された地域研究施設である。

本学術交流懇話会は、この東北アジア地域における自然、文化、社会構成などに関心を抱き、学術文化活動さらには産業・商業活動までを含めた交流に関心を持つ個人と法人が結集し、情報の交換、支援活動などを通じて東北アジア研究センターの活動力を高め、会員の利益と国際社会への貢献に寄与することを目的とする。

当面の目標と事業の概要

当分の間はロシア、ことにシベリアとの関係を主要な目標とし、日ロ両国の文化、科学、技術分野における交流促進を通じて、両国の友好関係の促進に寄与するとともに、21世紀における平和な国際社会の確立に貢献する。

中国、モンゴル、中央アジア、朝鮮地域なども随時活動対象とする。

具体的には、シベリアの州都ノボシビルスクのアカデミータウンに開設した日本館を拠点として、次の活動を行う。

- ・学術的共同研究、共同調査の企画、実行、斡旋
- ・技術的共同開発、共同調査、技術育成、技術移転に関する調査および情報の提供
- ・文化、経済交流の促進のための情報提供
- ・会員へのニューズレターの発行

【具体的事業計画】

1. 共同研究、共同調査の企画、実行、斡旋

東北アジア研究センターにおいて推進中の共同研究のほか、以下のような計画がある。

1) CO₂削減のための共同実施に関する共同調査研究

現在、計画中の日ロ両政府間による共同調査において、ロシア科学アカデミー・シベリア支部と共同で、学術調査部門を担当する。

2) バーチャル・ラボラトリ(6頁参照)の組織化と運営を通じての新しい共同研究方式の追求

マルチメディアを活用した新しい共同事業、共同研究方式の開発を試みる。新たな可能性を多面的に試みて、積極的に外部研究資源の獲得策に結びつける。

2. 学術情報並びに技術情報の提供と共同プロジェクトの斡旋

1) ニュースの発行

ロシア科学アカデミー・シベリア支部、ロシア医学アカデミー・シベリア支部、ロシア農学アカデミー・シベリア支部その他シベリアを中心としたロシアにおける科学情報の提供
それらと関連する技術情報の提供
それらのロシア語情報の翻訳

2) 研究者ディレクトリーの作成

研究所、研究者、研究テーマのデータベース
共同研究の要望調査

3) シベリア地域を中心とした研究所の紹介

4) 情報サービスの提供

研究機関、研究テーマ、研究者の調査、紹介
ベンチャープロジェクトなどの調査、斡旋
研究者、企業および製品などの調査、紹介

5) 共同事業に関する基礎調査の斡旋、実施

合弁事業の可能性調査、アクセスなどの調査

【運営資金】

運営のために会員より年会費を徴収する。会費は法人の場合一口5万円、個人会員の場合一口5千円とする。

会員を募ります

本会設立の趣旨にご賛同くださる方々には、是非ともご参加いただきたくご案内いたします。

ご連絡先

郵便：980-8576 仙台市青葉区川内 東北大学 東北アジア研究センター内 東北アジア学術交流懇話会

電話/FAX：022-217-6010 E-mail：gon@cneas.tohoku.ac.jp

萬華鏡

ロシア・アカデムゴロドクでの 江沢民主席の講演（要旨）

[1998年11月24日]

ロシアは世界でも重要な科学技術大国である。ロシアの科学者達は人類の文明の進歩に関わる事業に大きく貢献してきており、今日でも多くの科学技術の最重要分野で世界をリードしつづけている。アカデムゴロドクは高名で強大な学術拠点であり、ここで活躍される皆様方は多方面の分野において世界的に重要な多くの研究成果をあげられた。計170万人の人口を擁し、およそ100のさまざまな研究所や、20の大学、それに数万人の科学研究従事者を抱えておられる。私が知る限りでは、このようなところはまだ世界でも数少ない。

人類史上、科学の発展に連動した技術が無かったために、自然を知り利用する上での最も重要な成果というものあげることがなかった。人類の知能は無限である。科学者たちの努力で、この知能のシンボルとしての科学技術が全世界を照らし、数多くの障害を克服して、数々の新たな達成期待値をクリアした。

20世紀は科学技術に祝福され、利便性や物質的豊かさを享受することができた。またさまざまな研究・開発の業績は、自然や社会との結びつきにおいての人類の認識を格段と深めた。こうした知性の進化はさらに新たな産業を創出し、世界的規模の科学技術の発展は、新しい秩序を構築しつつある。しかしまた同時に人々を困難な選択の前に追い込んだ。仮にいずれかの国や民族が科学技術の進歩について行くことが出来ず、自らの科学技術水準の向上に力も注がずにいれば、世界から後れを取ることに、



極めて消極的な立場へと陥ってしまうであろう。科学技術の急激な発展や知的経済の急速な成長への対応で重要なのは‘革新’である。それは国家の繁栄と発展のための原動力であり、無限の源でもある。‘革新’の最重要要素は専門の人員の育成なのであって、つまり教育こそが科学、技術そして経済の発展を可能にする。

中国は世界文明発祥の地の一つで、古来人類の文明の進歩に大きく貢献した。新中国成立後、特に改革開放路線後の20年間、中国政府は常に科学と技術と教育の進歩に特別の注意を払ってきた。同志鄧小平の有名な言葉“科学と技術は主要な生産力となる”は、我が国の発展のための重要な指導理念となった。知的イノベーションとしての国家システムの建設に関する試験的な計画の実行の第一段階として、先般我々は一つの新しい決議を採択した。即ち21世紀に向けた、国の発展の戦略的なニーズからの出発であり、科学技術の発展の新たな目標としての到達点を見通す作業であり、科学技術イノベーションにおいて更に大きな、優れた業績を実現するべく現行のメカニズムを再編成することである。

我が国は科学・技術・教育面で諸外国との交流に力を注ぎ、更なる水準の向上を図ろうとしている。既に当地科学アカデミー・シベリア支部と協力関係が築かれており、今は一時的に困難な状況にあるとはいえ、ロシアは十分な力量を秘めており、中国にとって有意義なパートナーとなるであろう。我々両国は大国であって、手を携えながら世界の平和と発展に尽力しなければならない。この度、エリツィン大統領と共に21世紀に向けた中ロ関係の新たなプランを立案した。軍事力をバックにした協商を排除しつつ、互惠平等の原則のもと、隣人どうしとしての友好的協力関係はきっと確立しうると信じる。我々中国としてはその発展と進歩はなにものにも脅かさ

れることはないし、またたとえ将来更なる強国になったとしても、決して主導権を誇示するようなことはない。これは我々の不屈の国家的政策なのである。中ロ両国民も勤勉で、創造力に満ちた才能を持つ偉大なる国民であって、教育と科学を大事にするとい

う良き伝統に祝福されており、次の時代において必ずや科学と技術の発展に関わる事業に大いに貢献するであろうと確信する。

(翻訳 エコアジア市民フォーラム 前田みゆき 要約/文責 成澤勝)

Area Report **SIGNAL**

【モンゴル】

ラクダの世紀末

モンゴル遊牧民は、羊・山羊・馬・牛・ラクダの五種類の家畜を飼育し、ゴビ地方ではラクダの比重が相対的に高い。ラクダは、乳や毛が利用されるほか、荷駄用として、移動や交易に用いられてきた。1990年以後の市場経済化は、家畜達の運命をも分けた。山羊がカシミヤという付加価値の高い商品を生み出すため屠殺を免れる一方、絶滅の淵にまで追いやられたのはラクダである。2月26日付『ウドリン・トリ』紙はラクダ減少を訴えるウブスハンガイ県の畜産学者の投稿記事を載せている。これによると同県のラクダは、1950年の8万4千頭から、今年

は1万9500頭にまで減少した。これは、計画経済下のずさんな計画によって畜群中の受胎雌ラクダ比率が減少して調整バランスが崩れた上に、家畜私有化で2～3戸に1頭のラクダが分配され、屠殺されて肉として配分されたこと、豊富な肉・脂肪・油分を有するために食肉企業が優先的に買い付けたことが影響しているという。(岡洋樹)



モンゴル草原におけるラクダの放牧

【中国】

洪水の次は大氷河だ!! —深圳発—

1998年夏、中国のテレビは毎日長江の水位を克明に伝え、新聞には濁流に立ち向かう軍人の姿が掲載されていた。未曾有の洪水の後は、中国史上初めての大氷河期の到来!! もっとも大氷河期と言ってもここ数年暖冬気味の日本を襲っているあれである。中国の大卒予定者も、本年はついに110万人を突破。改革開放の旗手、深圳市においても11万人の大卒予定者。しかし、就職口は1万。1999年1月9日の「求職大会」での話である。この傾向は上海市も同じで、一流大学の学部首席卒業生の就職先も決して良いとは言えないものであった、と知人は息子の行末を天を仰いで嘆いていた。中国の大卒者が迎えてしまった就職大氷河の原動力は、主に3つある。筆頭はご存知リストラ、中国風に言えば「下岗」。2つ目は

アジアに吹き荒れた例の金融危機の嵐の力。いま一つは、大卒者の専門コースが貿易・財務・経営学などと言った即戦力を期待した集中豪雨で、供給過多、ついには大氷結してしまったわけである。経営側にとっては、人材の買い手市場であるが、その反面あふれた大卒者の心は冷えている。この大氷河期に直面する大卒者の就職難は、陽ざしの見えないアジア経済と連動する中国経済の体温の度合いによっては、今後の社会問題、そして政治問題化へと発展する可能性も無くはない。かつて、王朝の交代時には決まって知識人層の不満爆発があったからだ。やはり冷え過ぎは身体に毒である。(磯部彰)

Area Report
SIGNAL

【朝鮮地域】

ベンチャー企業育成本格化

国の経済発展の牽引力として大企業に頼ってきていた韓国であったが、事業種目の交換や企業統合等‘ビッグディール’と呼ばれる大企業の一大整理事業のさなか、中小企業・ベンチャー企業の育成に乗りだした。一昨年度来の経済危機において、失業率はパーセンテージが二桁の大台にも達しようとしているが、こうした状況への対策でもあって、国民全体の活力を十分に生かし、雇用の創出を図ったものである。

韓国政府は第一次経済対策調整会議において、今後ベンチャー企業・中小企業を創業すれば、創業から2年間は取得税と登録税を全額免除し、また個人がこうした創業投資組合やベンチャー企業に対して直接投資する場合、投資金額の30%を総合所得から控除する旨決定した。新時代の富の蓄積メカニズムへの着実な試みといえよう。(成澤勝)



両班貴族階級の邸宅
朝鮮王朝時代の富の象徴

【ロシア】

ロシアの高麗人

ロシア極東に数多く住んでいる朝鮮系の人々は自らを「高麗人」と呼ぶ。ロシアでの定説では彼らの祖先が最初にロシア領内に進出した時期は1860年代とされてきたが、最近の韓国での研究によれば実際にはそれよりもかなり早く、1811年からであったという。朝鮮半島北東部の咸鏡道は山岳地帯のため耕地面積自体が狭小で、さらに一般農民たちは土地所有権を持つ両班（ヤンバン）階級によって激しい収奪を加えられ、奴隷のような小作人として扱われていた。このような土地でこの時期には天変地異や民乱・兵乱が相次ぎ、1811-12年に起こった「洪景來の乱」という民衆反乱の後、多数の貧しい農民たちが国境の豆満江を渡って沿海州に脱出していったのだという。彼らの子孫たちは1930年代になってスターリンの民族政策によって中央アジアの砂漠地帯に強制移住させられ、大変な辛酸をなめた。19世紀前半の朝鮮北部のこの状況は厳しい飢餓にあえぐ現在の北朝鮮の状況を連想させるが、こんな苦難の歴史が再び繰り返されることのないように願わずにはいられない。(柳田賢二)



ユジノサハリンスクの中央市場
朝鮮系の人々がとても多く、店の造りかたは韓国の市場によく似ている。

Area Report
SIGNAL

研究機関紹介

ロシア科学アカデミー・シベリア支部

無機化学研究所長 F.A.クズネツォフ

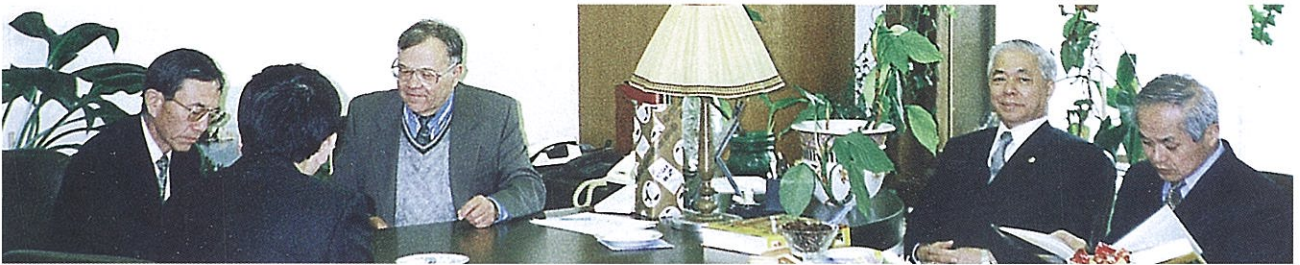
ロシアでは伝統的に主要な学術研究は、ロシア科学アカデミーの研究所で行われてきている。1957年までは科学アカデミーの研究所は主にヨーロッパ・ロシアに置かれていた。1957年にソ連は科学アカデミー・シベリア支部の設立を認可した。これは投資額、新機軸の重要性等において、ロシア科学アカデミーの歴史の中で発足以来最大の出来事であった。ロシア科学アカデミー・シベリア支部の創設は、シベリア最大の都市ノヴォシビルスクで学術研究都市の建設とともに始まった。その後、東シベリアと西シベリアの10都市にも学術センターが創設された。シベリア支部はこれまで、多方面の基礎研究、大規模の応用研究等により高い評価を得てきている。

従来よりシベリア支部の研究所は国際的な関係を

維持してきた。なかでも東北大学とは特別な関係が形成されており、1992年にはシベリア支部と東北大学との長期協力に関する協定の調印に到った。協定の発起人は西澤潤一前総長であり、彼はすでにロシア科学アカデミーの外国会員であった。1996年に東北大学に東北アジア研究センターが設立され、1998年にはノヴォシビルスクに連絡事務所「日本館」が開設された。東北大学のこの支部は、日本の大学の組織としてロシアで初めて登録された。

シベリア支部と東北大学との協力は現在、共同の顧問会議により調整されている。先日行われた顧問会議では、コンピュータ衛星通信システムを基に、ヴァーチャル・ラボラトリーの発展に関する重要な決定が行われた。シベリア支部と東北大学との協力が将来さらに発展することに疑問の余地はない。

(訳/文責 塩谷昌史)



東北大学とロシア科学アカデミー・シベリア支部との協定更新の場面(1997年9月22日)
左より 阿部総長、吉田東北アジア研究センター長(後姿)、ドブレツォフ同支部総裁、西澤前総長、徳田教授

最前線探訪

バーチャル・ラボラトリーの試み

インターネットなど新しい通信手段を駆使して、多様な形態の情報を大量に高速で通信することが可能になるにつれ、複数の構成員が参加する様々な形の共同作業を、離れた地点で居ながらにして進めるという遠隔共同作業の現実味が、急速に高まってきている。本センターも、ロシア科学アカデミー・シベリア支部が本拠を構えるノボシビルスクのアカデミータウンに開設した日本館に、VSATによる衛星通信を利用したTV会議のシステムを導入した。これを用いて、大量のデータのやりとりだけでなく、データを見せ合ったり、黒板にアイデアや図式を書いたり消したりしながら行う討論を、あたかも同じ部屋にいるような形で進めることが出来ることを期待して、バーチャル・ラボラトリーと命名し、マルチ

メディアを利用した新しい共同研究方式の可能性追求という位置づけも含めて推進することとしている。

4~5のテーマが登録されているが、ここでは、ロシア側で合成したユニークな物質について、日本側が開発した様々な手法で特性評価を行うという形で、共同で新しい物質創製、材料開発を行う例を紹介する。独自の方法で創製した様々な揮発性有機金属化合物から、CVD法により作成した新しい化合物半導体結晶について、新方式の電子顕微鏡による特性評価を行う研究が、既に進められている。現状は、転送容量の制約も大きく、電顕写真を見ながら意見交換をする程度であるが、将来は、ロシア側から、日本にある電顕の直接遠隔操作を可能とする高度なシステム開発も含めた新方式の共同研究に発展させたいと考えている。

(徳田昌則)

日本館から

ノボシビルスク消息

アカデムゴロドクの街ができておおよそ40年。マルスコイ通りもまた、ほぼ40歳である。この通りの並木の高さはちょうど40年分。最初にこの街の建設者たちが植樹したときには、子供と同じ位の背の高さしかなかったらしいが、今では立派な並木道になっている。私はここを歩くのが好きだった。連絡事務所での仕事の帰り、バス停をひとつ早めに降りて歩いて帰る。鞆にはノートパソコンや資料類が入っていて、肩に食い込むほど重かったが、この散歩はそれでもやりたくなるほど、この並木道は美しい。駐在員の生活のなかで、少しのゆとりがこの並木道にはある。歩道の両側にある並木は、車道側に白樺の並木、煉瓦の団地に面する側に松の並木。歩道にはいっぱい松ぼっくりが落ちていて、ときおり松の悪戯か、頭にこつんと落ちてくる。無機化学研究所のベラスルーダフ夫妻がなかよく夕刻に散歩をしているのに出会う。混乱するロシアにあって、豊かなひとときである。

アカデムゴロドクの無機化学研究所に東北アジア研究センターの連絡事務所ができたのが、昨年5月28日であった。私は初代連絡事務所所長として連絡事務所の開設・運営に携わった。連絡事務所開所式、ノボシビルスク市長への表敬訪問、各研究機関との交流、モスクワの科学技術省との交渉、様々な開設手続き、オフィスの運営、思い返すだけで目まぐるしかった駐在であったが、どれひとつとっても、日本にいるセンターのスタッフ、無機化学研究所のスタッフ、現地の友人たちの支えがなければ、駐在員ひとりではうまくいかなかったといえる。まさに、この連絡事務所は、多くの人の手による手作りの事務所である。

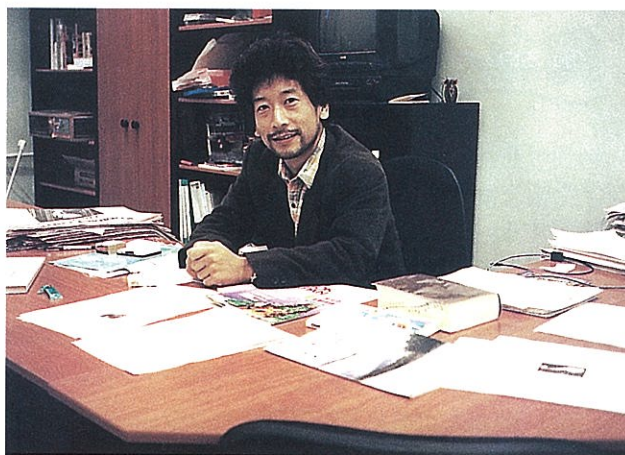
駐在員のもうひとつの仕事、それは宿泊施設の運営である。駐在員は、アカデムゴロドクにアパートを借りて生活しているが、日本から研究者がノボシビルスクを訪問する際には、宿泊施設として部屋を提供している。日本からノボシビルスクを訪問する研究者は、ロシア語ができず、ロシアでの生活も初めてであることが多く、長期滞在の場合、日常生活のサポートが大変重要になる。最近では、スーパー形式の食料品店が多くなったため、店員との交渉などに直面することは少なくなっているが、それでも「ロシア初心者」にとっては、ちょっとしたことでも大冒険なのである。しかし、せいぜい2週間ほ



マルスコイ通り ノボシビルスクの路上商

ど密着してオリエンテーションをすると「ロシア初心者」も立派な「ロシア通」になってしまう。

シベリアの経済発展を支えつづけてきた科学アカデミー・シベリア支部の諸研究所も、近年の経済停滞、国家財政の緊縮により苦境にある。もちろん、ロシアの科学政策に合致した資源・エネルギー関連の研究所は、その高度な研究蓄積から、繁栄する研究所となっている。逆に、優れた研究蓄積を持ちながら、窮状に苦しむ研究所が多く存在する。賃金遅配、生活水準の低下など、科学アカデミーに限った現象ではないとしても、研究所群の優れた潜在力とそこに生活する素晴らしい人々を目の当たりにすれば、われわれの学術交流がアカデムゴロドクの活性化に僅かなりとも貢献できればと願わざるを得ない。



日本館のオフィス

アカデムゴロドクの一日の終わりに、友人の
アンドレイ・クズネツォフ（無機化学研究所職員）
とウォッカを傾けながら、疲れを癒した。彼によれば、「誰と、何処で」飲むかがウォッカにはとても
重要な要素なのだそう。そう、学术交流も同じで

ある。いま、このときに、ノボシビルスクで科学
アカデミー・シベリア支部とともに切磋琢磨してい
くことは、シベリアの発展にとっても、日ロ学術
交流にとってもかけがえのないものなのだとは
確信している。（堀江典生）

センター動向

3月及び4月現在の東北アジア研究センターの
客員研究者をご紹介します。

【国内から】

- ☆渡邊幸治(ワタナベ,コウジ)教授:経済団体連合会
特別顧問・前在ロシア連邦日本国特命全権
大使、開発と社会変容の研究
- ☆小谷凱宣(コタニ,ヨシノブ)教授:名古屋大学人間
情報学研究科教授、東アジア北アジア交流論
- ☆横山隆三(ヨコヤマ,リュウソウ)教授:岩手大学
工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- ☆朴星來(パク,ソンネ)教授:韓国、韓国外國語
大學校人文大学史学科教授、日韓科学技術
交流史の研究
- ☆Fedor A.Kouznetsov (クズネツォフ,F.A.)教授:

ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア
支部無機化学研究所長、シベリア・極東部を
中心とするロシアにおける温室効果ガスの
発生と抑制に関する調査研究

- ☆Victor Ivanov (イワノフ,V)教授:ロシア、ロシア
科学アカデミー・極東支部火山研究所教授、
カムチャッカにおける爆発的火山活動
- ☆劉世徳(リュウ,セトク)教授:中国、中国社会科学
院文学研究所教授、日本における中国古典
小説版本の研究
- ☆汪立珍(オウ,リッチン)研究員:中国、中央民族大
学講師(中国政府派遣研究員)、満族文化史
ハソングース論
- ☆Arvidas Cheryauka (チェリャウカ,A)研究員:
ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部
地球物理学研究所上級研究員、V S A T シス
テムを利用する分散型データベースの構築

編集後記

創刊号発刊に際し、江主席の講演文入手等、東北ア
ジア学術交流懇話会からの積極的な支援に与ったこと
を特記する。江沢民主席の講演は報道ではいずれも、
その事実あるいは要点を伝えるのみであったが、全文

を得ることにより江主席の言わんとする更にいくつか
の[国内外に向けた]メッセージを読み取ることがで
きる。編集に当たってはその辺りが失われぬようにも
心掛けた。（成澤勝）